

暉峻 淑子著『豊かさとは何か』岩波新書（1989年）

筆者が本書を初めて読んだのは、高校生か大学生の時と記憶している。本書が発行されて30年近く経つ今、単純な疑問であるが、なぜ日本は豊かだと感じるができないのだろうか。

本書を読み返しつつ思ったのは、この間日本の社会も政治もさほど変わっていない（むしろ悪くなっている）ことに驚きを感じたことだ（蛇足だが、変わっていないという点は、労働組合が持たれている世間一般のイメージにもあてはまるかもしれない）。本書が発行された時代と比べれば、現在ではGDPも所得水準も上昇しているが、その一方で格差は拡がり、貧困化が進んでいる。また、年金や医療、介護などの社会保障に対する不安はもとより、将来に対する不安も増大するばかりで、著者が警鐘を鳴らしていた日本の将来が現実となっている。本書は古い…と言われればそれまでだが、取り上げられている多くの課題は現在にも通じていると思うし、普遍的な課題ともいえる。

本書は、「一 金持ちの国・日本」、「二 西ドイツから日本を見る」、「三 豊かなのか貧しいのか」、「四 ゆとりをいけにえにした豊かさ」、「五 貧しい労働の果実」、「六 豊かさとは何か」と6つの章から構成されている。

まず、1980年代後半の経済大国日本の揶揄から始まる。カネとモノにあふれ、世界一金持ちの国になったという日本…ただその豊かさは表面的なもので、日常生活の実態はゆとりも豊かさの実感もないという。著者は「豊かさに憧れた日本は、豊かさへの道を踏み間違えた」と指摘している（「一 金持ちの国・日本」）。ちなみに、今では当たり前となっているが、週休2日制が法的に整備されてきたのもこの時期であり、その週休2日制も女性にとってはゆとりにつながらず、働き続けにくい状況を生み出しているという実態が、事例とともに紹介されている。週休2日制になったことで、他の日に仕事のしわ寄せがくる、残業も増える。今ならノー残業デーや一斉退社日がそれにあてはまるだろうが、それに伴う影響は昔も今もほとんど変わっていない。

そんな日本の実状を、著者は（当時の）西ドイツでの在住経験と対比させながら、日本との違いを鮮明にする（「二 西ドイツから日本を見る」）。昨今では、福祉を経済成長にもつなげているスウェーデンなども比較対象として取り上げられるケースが多いが、それを表面的に真似ようとしても上手くはいかない。諸外国との対比で学べることは、個々の政策以上に、政治や社会保障制度に対する関心や信頼感をいかに形作ることができるかのプロセスを学ぶことではなかろうか。

また、本書は調査活動に対する“気づき”も示唆してくれる。昨今労働組合の調査で実施される機会が少なくなってきた家計調査（本書では生計調査）ではあるが、やはり生活水準やゆとり・豊かさを考える上では重要な指標となりうることが示されている（「三 豊かなのか貧しいのか」）。さらに、働き方や労働時間の問題を考える上で、いわゆる生活時間調査のような手法も必要となること（四 ゆとりをいけにえにした豊かさ）。確かに、これらの調査は実施が難しく時間もコストもかかるものではあるが、より詳細な実態が確認できる分、様々な活用方法があるに違いない。

“豊かさ”という観点からは少し離れてしまったが、著者は「豊かさは、それぞれの個人の生き方の問題であると同時に、社会や政治の問題と切り離すことができない」（「三 豊かなのか貧しいのか」）、「豊かな社会の実現は、モノの方から決められるのではなく、人間の方から決められなければならない」（「六 豊かさとは何か」）と指摘する。社会資本や社会保障の問題は、政治に大きく関わる。選挙が行われるたびに、一人ひとりが無関心であってはならないと思う。組合活動に対しても政治に対しても社会に対しても、自身の意思を示すことで、よりよい社会を築く一歩につながり、人と人のつながりをも形成するきっかけになるはずである。

大リーグ通算3,000本安打を達成したイチローはかつてCMでこんなことを言っていた…「変わらなきゃ」と。今こそ一人ひとりが“変わらなきゃ”何も変えられない…変わるなら“今でしょ”。（小倉 義和）